

2012年11月10日・図書新聞「文学」欄では

父の戦死と妹の原爆死を想い、 百回忌に向けての執念を燃やす

詩活動による反戦、非核平和の運動に力をそそいだ詩人

この全詩集には増岡敏和（一九二八～二〇一〇）の既刊十四冊の詩集と未収録詩を合わせた四六四篇、評論三篇、増岡氏への追悼文三篇、解説三篇、年譜で構成されている。

広島出身の増岡敏和は一九四三年、一五歳のときに海軍の飛行予科練生として四国の松山航空隊にはいったが、二年後の八月に高知で敗戦をむかえる。その年の二月には父が民間人でありながらフィリピンのマニラで現地徴用されて戦死しており、女子学生の妹は八月六日の原爆投下で、爆心地に近い市内で一二歳で亡くなっている。その娘を探しつづけた母も被曝した。同年九月、増岡は焼け野原となった広島に帰り、父と妹を奪った戦争と原爆への怒り、平和への強い思いで、その人生をつらめくことを決意した。

その翌年には上京し、法政大学予科に入学して経済学部に進んだが、経済的理由でやむなく帰郷する。その後、県庁を経て国税局に勤めながら、労働運動をつづけるなかで、峠三吉と出会い、「われらの詩の会」を結成する。そして連合軍占領下の広島で、サークル活動を通じて、反原爆と反占領、反朝鮮戦争の活動を継続することになる。

しかし一九五一年にはGHQのレッドパージのために公職を追放され、職場を転々としながら、詩活動による反戦、非核平和の運動に力をそそぐ。第一詩集『風の子物語』（一九五二）はそのような状況のなかで、深川宗俊と峠三吉の跋をつけて出版されたが、そこには母を想い、人間を愛する作者のまなざしが見いだされる。

第二詩集『平和に生きる』（一九五三）では「監獄詩抄」のなかの「元気で出てきました！」という作品のように、力強いあいさつ調のものがあつたり、また「スターリン星」のように、当時、英雄視された旧ソ連の政治家にささげる作品もある。さらに第三詩集『明日への眼』（一九五六）では「原爆で殺された玲子」と改題されて収められている「妹よ、歌いつごう」は、原爆投下で死に別れとなった妹への痛切な追悼と平和への強い願望が表現されている。

それ以後の詩集でも、日米安保反対闘争やベトナムの人びとへの連帯などを民医連に勤務しながら作品にしている。

……

「五十回忌をなされる方は大変数少ないことでございます。お父さんは若死になされ、お妹さんはお兄さんにとって逆縁になりますが、この数少ない機会に、ご兄弟姉妹ご一族がお揃いになれるのは、亡くなられたお二人のお引き合わせでございます……」

父は四十三歳で、外地で戦死。

妹は十二歳で、原爆死。

施主たちの幾人かは被爆者で。

……

お坊さんが話し終わった時「五十回忌の次はないのですか」とお聞きしたら、「百回忌がありますが、まず出来るお家^{うち}はないでしょう」とのことだった。「執念のように生き残って、百回忌は兄弟姉妹の誰かにやってもらいましょう」と呟くと、親鸞上人らしい「尊いご供養です」の声に添えられた静寂が、私の顔を搏ってきた。

……

〈「五十回忌」部分・第十一詩集『花なき薔薇の傍で』（一九九七）所収〉

かつて軍国少年であった増岡は、日本の敗戦後に一念発起して父の戦死と妹の原爆死を「執念のように」作品にしつづけ、まさに百回忌に向けて、一卷の全詩集ができあがったのである。増岡の執念は東京大空襲や沖縄戦などをうたって、カンタータ詩集と名づけられた第十四詩集『永代までも言問わむ』（二〇〇五）や未収録の詩篇にいたるまで、随所に見いだすことができる。

この全詩集は、たとえその時代の熱気に左右された思考や、表現上における修辞の抜群の巧妙さはなくても、詩人としての生きかたに多くの示唆をあたえるだろう。とくに三・一一の東日本大震災による原発事故以後の現代詩を考えると、貴重な意味をもってくるにちがいない。宮本勝夫、佐相憲一、鈴木比佐雄の解説はそれぞれの角度からの確に論じられている。（詩人 有馬 敲）

と紹介されています。